

主 題：確信を持つ聖徒の感謝と希望

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章3－8節

命題：神が聖徒を救ってくださるという確信は感謝と希望を生む。

きょう皆さんとともに、私たちの主、イエス・キリストを礼拝できることを感謝します。

ピリピ人への手紙1章をお開けください。本日はピリピ1：3－8をご一緒に見ますが、全体の文脈を考えていただくために、1－11節をお読みします。

ピリピ1：1－11

「1 キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。：2 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。：3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、：4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、：5 あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。：6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。：7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。：8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。：9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、：10 あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、：11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現されますように。」

前回、私たちは1－2節を通して「パウロのあいさつ」を見ました。パウロは救われた私たちが神のものであることを思い出させてくれました。救いをいただいた私たちは、キリスト・イエスの奴隷であり、キリスト・イエスの聖徒であり、神と親密な交わりを持つ者であり、神から恵みと平安をいただく者とされました。救われた私たちは神のものであり、神の栄光、神のすばらしさを現すために生きることのできる天国の民とされました。

さて、パウロは「パウロのあいさつ」に続いて、3－8節で「パウロの感謝」について語っています。パウロの感謝はピリピの聖徒の救いについてでした。神が確かにピリピの聖徒を救ってくださり、新しく生きることができる者とされたことを神に感謝し、あかししたのです。神が私に救いを与えてくださると確信すること、この救いの確信は、私たち聖徒のうちに感謝と希望を生み出します。神が私たちに救いを与えてくださるお方であると確信することはとても大切です。なぜなら、神が私を救ってくださると確信する者は、自分の救いに疑いを持ちません。むしろ、神が罪から救い、罪を聖めて成長させてくださり、福音を宣べ伝え、神のすばらしさを現す者としてくださっていることを感謝します。救いの確信が心にあり、その喜びと希望をもって、神のすばらしさを現す者として生きることができるからです。

神が救いを与えてくださると確信する者は、神を信じ、信頼して生きることができます。神との交わりを生き生きと楽しみ、自分を救ってくださる神を愛し、神のみことばに従いたいと願います。救われた喜びがあなたの心にあり、自分に与えられた救いを語り、あかししたいと願うのです。ちょうどイエス・キリストが私たちに話されたように、イエス・キリストの弟子を作りたいという願いが起こされま

す。それは、私たちの心の中に、神が私を救ってくださるという確信があるからです。私たちは神に感謝し、神を希望として生きる者とされるのです。

しかし、もし、あなたのうちに、この確信がないとしたらどうでしょうか？確かにあなたは聖書のみことばを読み、聞いているかもしれませんが。また、かつて、口ではイエス・キリストを自分の罪からの救い主として信じますと信仰告白をなされたかもしれませんが。しかし、もし今あなたの心の中に、神が確かに私を選び、救ってくださる神であるという確信がないならば、どうぞきょうのこのメッセージを聞いてください。そして、この救いの確信をしっかり持って生きることが、私たち聖徒にとって、どれほど大切なことかを思い出していただきたいのです。救いの確信がなければ大変です。私たちクリスチャンが救いの確信を持っていなければ、信仰に立って生きることができません。福音を伝道し、弟子を作ることは難しくなります。また、その生き方において、周りの人々にあかしをすることができなくなります。むしろ、神のみことばに従順に生きる生き方ではなく、この世と調子を合わせようとしたり、影響を受けたりします。それだけでなく、もし、救いの確信がないならば、心が不安でいっぱいになったり、神を信頼できなくなったりします。神のみことばに信頼できず、神を疑い、神につぶやきをしてしまうのです。あなたと神との関係にまで影響が及びます。私たちは、仕事や結婚、日常の判断の中でも、神のみこころを求めて生きているのでしょうか？私たちの日常の判断や決定は、主のみこころに従っているのでしょうか？私たちにとって、神のみこころに従うことはとても大切です。それが神に喜ばれる天国の民の生き方だからです。でも神のみことばに従って生きる天国の民としての生き方も、私たち自身のうちに救いの確信がなければ難しくなるのです。

では、どのようにしたら、私たちはいつもこの確信を持って生きることができるのでしょうか？パウロはピリピの聖徒の救いを感謝しました。それは神が聖徒を救ってくださるという確信をパウロが持っていたからです。神が救いを与えてくださるという確信は私たちに感謝と希望を生み出します。きょうのメッセージの命題は「神が聖徒を救ってくださるという確信は感謝と希望を生みだす」ということです。本日のテキストを通して、パウロは私たちの偉大な神が、確かに私たちを救い、神のすばらしさを現して生きることができるようになされたことを証します。ご一緒に3-8節を見ていきましょう。

A. パウロの感謝 3-5節

まず、ピリピ1:3をごらんください。3節の原文は「感謝します！私の神に」ということばで書き始められています。パウロの感謝は3-6節まで続きます。まず1-5節を通して、パウロの感謝がどのような感謝であったかを見た後で、6節でパウロの感謝がどのような確信に基づくものであったかを順に見ていくことにしましょう。3-5節の中で語られているパウロの感謝のポイントは五つあります。

1) 神に捧げる感謝 3節

まず、パウロの感謝の一つ目のポイントは、3節にあるとおり「神に捧げる感謝」であったということです。3節でパウロは「私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し」と書いています。パウロは「私の神に」感謝したのです。さて、パウロが神に感謝しているのはなぜでしょうか？それは、ピリピの聖徒の救いが神の働きであったからです。パウロはピリピの聖徒に対して、神がなしてくださった救いの御業を感謝しました。この3節で、パウロと神との個人的な親しい関係を表しています。彼は「私の神に感謝」と言いました。私たちも祈りを捧げるときに、神の子とされた者として神を信頼し、親しく祈ることができます。パウロはこの3節を通して、私の神に感謝をささげると言ったのです。しかもこの「感謝する」ということばは現在形で書かれていて、パウロがいつも繰り返し神に感謝したことを教えてくれます。私たちはどうでしょうか？神から与えられていることについて、日々、感謝しているのでしょうか？私たちを救ってくださった神に、感謝をささげているのでしょうか？パウロはピリピ教会の聖徒について、パウロの神に繰り返し感謝をささげました。

2) 思い出に基づく感謝 3節

二つ目に3節に出てくるパウロの感謝のポイントは、「思い出に基づく感謝」であることです。パウロは「私は、あなたがたのことを思うごとに」と言いました。ここでパウロはピリピ教会の聖徒をひとりひとり思い返して、神に感謝したと言っています。Ⅰテサロニケ2：2では、パウロは、ピリピの聖徒について「ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。」と言っています。パウロは、ルデヤや牢屋の看守、看守の家族たちが救われた救いのことやパウロやシラスが捕らえられてむちで打たれ、投獄されて迫害を受けたことなどを思い返したのです。

また、パウロにとっては、繰り返しピリピ教会の聖徒たちを思い返すきっかけがありました。実際にパウロがこの手紙を書いていた時にも、エパフロデトがピリピ教会からパウロのところに来て、パウロの必要を満たしたと書いています。パウロはピリピ教会やマケドニヤの諸教会について、Ⅱコリント8：1－5で次のように述べています。「：1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思えます。：2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。：3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、：4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。：5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」、バークレーという学者によると、このマケドニヤの諸教会というのは、ピリピ、テサロニケ、ベレヤなどの地域の教会を含みます。その中にあっても、8：5を見ると、「神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」と書かれています。バークレーはこれを見た時に、ふたりの人物が心に浮かぶと言っています。ひとは、ピリピに書かれているエパフロデトです。この人物はピリピ教会から贈り物をパウロに届けましたが、病気になり、まさに死ぬばかりになっても主に仕えました。まさに神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげてお仕えたのです。バークレーは、もうひとりの人物はアリストアルコというテサロニケ出身の人物で、パウロがローマで捕らえられた時に同行するために、恐らく自分の意思で自分の身分をパウロの奴隷として仕えたのであろうと述べて、みずからをささげたのだと言っています。いずれにしてもⅡコリント8章で、マケドニヤの諸教会も複数形で、パウロが繰り返し「彼ら」と述べているとおり、奉仕した者も単数形ではなく複数形ですから、ふたり以外にもいたのかもしれない。

このマケドニヤの諸教会の中には、ピリピ教会も含まれており、事実、パウロはピリピ教会から贈り物やエパフロデトの訪問を受けたのです。パウロはピリピ教会が繰り返しパウロの必要を満たしてくれたことについて感謝し、ピリピ4：15－16でも「：15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。：16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。」と述べています。パウロが言うのは、ピリピ教会の聖徒がパウロのために祈るだけではなく、実際にパウロの必要を満たすために、繰り返し贈り物を届けたということです。パウロは贈り物を受けたとった時に、ピリピの聖徒のことを思い返し、感謝するのです。その贈り物は、テサロニケにいる時でさえ一度ならず二度までも彼は受け取るのです。7－8節でも見るとおり、パウロはピリピの聖徒と一緒に過ごした時間や、福音宣教したことを思い返し、その配慮を感謝し、神に感謝をささげていると言うのです。

3) 喜びをもって祈る感謝 4節

4節に出てくるパウロの感謝の三つ目のポイントは、「喜びをもって祈る感謝」であったということです。4節に「あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り」とあります。パウロはピ

リピの聖徒が救われて、信仰が成長し、ますます神に用いられる、神に喜ばれる者として生きていたことを喜び、また、祈りました。ピリピ2：16－18でパウロは、「:16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。:17 たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。:18 あなたがたも同じように喜んでください。私といっしょに喜んでください。」と述べました。パウロの働きはむだではなく、ピリピの聖徒が神の栄光を現す者とされることを喜びました。パウロの喜びは弟子の成長を喜ぶ感謝でした。ちょうどⅢヨハネ2－4でヨハネもこのように言っています。「:2 愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。:3 兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言してくれるので、私は非常に喜んでいます。:4 私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。」と。同じように、パウロはピリピ教会の聖徒の信仰の成長を喜び、神に感謝しました。また、パウロはそのことを祈りました。原文には「すべての神に捧げる願い」と書かれていて、「神に捧げる願い」ですから、「祈り」と訳されています。パウロはピリピの聖徒の成長を喜び、繰り返し喜びをもって祈りをささげました。

4) 働きの継続についての感謝 5節

四つ目に見られるパウロの感謝のポイントは、「働きの継続についての感謝」です。5節に「あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。」と書いています。この「感謝しています」ということばは原文にはなく、補足されています。パウロは、ピリピ教会の聖徒たちが「最初の日から今日まで」働きを継続していたことを「感謝しています」と述べたのです。さて、この期間はどれぐらいの期間だとお考えになりますか？パウロが「最初の日」、つまり第二次宣教旅行でパウロとシラス、ルカたちが初めてピリピを訪問し、救われる人たちがおこされてから、パウロがこのピリピ人への手紙を書くまで実際には約10年以上の月日がたっていたのです。その間、ピリピの聖徒たちは途絶えることなく、信仰を持って従順に神に従い続けたのです。パウロはそのことを感謝したのです。

しかも、ピリピ教会には問題がなかったわけではありません。ピリピ1：28－30を見ると、ピリピの町では反対する者がいて、彼らは迫害に遭っても変わることなく、信仰を投げ出さず、信仰の闘いをしているとパウロがあかししています。パウロは、そのように最初の日から今日まで、ピリピの聖徒が信仰を持って生きていることを神に感謝したのです。

5) 福音宣教の感謝 5節

最後に五つ目のパウロの感謝のポイントは、ピリピの聖徒が「福音宣教に参加していた感謝」です。パウロは5節の中で「あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。」と述べました。原語では“コイノニア”、もともとは「同志」という意味から、「交わり」や「参加する」、「関与」という訳がされることばです。（レジメにある「能動態」ということばは消してください）ピリピ教会の聖徒は、自発的に熱心に、福音宣教の働きに参加しました。ピリピ1：7－8を見ても、ピリピ教会の聖徒たちが福音宣教に熱心であったことがわかります。彼らは率先して、自発的に福音の働きに参加しました。

今、パウロの感謝について、五つのポイントを見てきました。まとめてみると、パウロの感謝は神に捧げる感謝であり、二つ目に思い出に基づく感謝であり、三つ目は喜びをもって祈る感謝であり、四つ目は働きの継続に対する感謝であり、五つ目は福音宣教への参加の感謝でした。ピリピの聖徒は、救われて信仰を持ち、自発的に福音を伝える働きに参加しました。パウロは、神が確かにピリピの聖徒を救ってくださり、信仰を保ち続け、その信仰が福音伝道の働きであかしされていることを感謝しました。

私たちは、神が私たちに罪からの救いを与えてくださり、今生かされていることを神に感謝し、喜んでいくのでしょうか？

B. パウロの持っている確信 6節：神の働への確信

さて、次に私たちが見ていきたいのは、パウロの持っている確信です。6節には「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。」と書かれています。パウロの確信は、神の働きについての確信でした。パウロは神がピリピの聖徒になさる神の働きを確信して感謝しました。このパウロが持っていた確信についても五つのポイントを見ることができます。一緒にパウロの持っていた確信を見ていきましょう。

1) 神が聖徒の心のうちに働きをされる。

6節から五つのポイントがあるのですが、パウロの持っている確信の一つ目は、神が聖徒の心のうちに働きをされるという確信です。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は」とあります。これは、神が聖徒の心の内面に働きをしてくださるということです。聖徒は私たちの主、イエス・キリストを救い主として信じ、救われますが、聖霊なる神が私たちの心のうちに働きをなさるのです。6節でパウロは、神は聖徒の心のうちに働きをなしてくださることを語りました。神がどのような働きをなさるかについては、後のポイントでも見ていくことになります。

さて、ここでもし皆さんが第三版の新約聖書ではなく、2017年版の聖書をお持ちでしたら、違う訳がされていると思います。そこには「あなたがたのうちに」ではなくて、「あなたがたの間で」と訳されています。実は、ここには「中に」とか「うちに」、「間で」と訳せることばが使われていて、どちらの訳も間違っていないです。新共同訳聖書の訳では「あなたがたの中に」となっていますし、リビングバイブルは「あなたがたの内面に」と訳しています。私が何を言おうとしているのかというと、「あなたがたの間に」という訳を考えた時に、「神がピリピの聖徒の間でなされている神様のみわざが聖徒の心のうちに始められ、完成される」と理解されれば良いのです。実際に問題となっているのは、例えば実用聖書注解などの日本語の注解書の中には、ピリピの人たちの「あなたがたの間で」と書かれているので、これはピリピ教会の地域でなされている福音宣教の働きであると考えられる人たちがいることです。そのような考え方をすると、キリスト・イエスの日が来るまでに、ピリピでの福音宣教の働きが神によって完成されると考えるのです。このような考え方をすると、神が働きをなさるのは福音宣教であって、ピリピの聖徒の心のうちに働きをなさるという理解とは異なります。

では、実際にパウロはここで何を伝えたかったのでしょうか？6節のポイントは、神が聖徒の心のうちに働きをなさると理解するべきであると考えます。その根拠は二つあって、一つ目は文脈です。流れを知るために、先ほど1-11節を読んだのですが、9-11節では「パウロの祈り」が出てきます。パウロはピリピ教会のために、その聖徒のために祈るのですが、「私は祈っています。あなたがたの愛が……いよいよ豊かになり、」と、神が聖徒の心のうちになさる働きを祈ります。それゆえ6節も神が聖徒の心のうちに働きをなさると考えるのが文脈から当然と考えられます。

また二つ目の根拠は、同じピリピ2：12-14でも、パウロが語る神の働きは聖徒の心のうちになされる働きだからです。「：12 そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。：13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。：14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」と書かれています。この中で13節に神がなさる二つの働きが出てきました。一つ目は神が志を立てさせてくださることであり、二つ目は神が事を行わせてくださることです。さて、このみことばが教えてくれることは、神は聖徒の心のうちに、神のご好意で神のみこころをしたいという志を立てさせてくださるといったことです。神が聖徒の心のうちになさる働きが書かれています。また、ピリピ4：13でも「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるの

です。」とパウロは語りますが、神がパウロのうちに力を与えて強くしてくださるとパウロは言うのです。1：6に戻ると、「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は」というのは、神が聖徒の心のうちに働きをなさることをパウロは確信したのです。

2) 神は聖徒のうちに良い働きをなさる。

次に、二つ目のポイントは神は聖徒のうちに良い働きをなさるといことです。エペソ2：10に「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」とあります。聖徒は神の作品であって、良い行いをするために造られたと教えています。神が私たちのうちに、神のご計画に従って、神の働きをなさるとパウロは教えます。また、先ほど見た、ピリピ2：13でも「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、」とあります。「神は、みこころのままに」とは、もともとの文章では「あなたがたのうちに力が働き、神のご好意、善意のために、やりたいと思わせてくれること」という意味になります。つまり、それは神がなさる良い働きなのだと言っています。神が聖徒の心のうちになさる働きは、良い働きであるという確信をパウロは持っていました。

3) 神が働きを始められた (完了形 アオリスト)

三つ目のポイントは、神が聖徒のうちに働きを「始められた」といことばです。このことばの時制は完了形(アオリスト)で書かれていて、すでに過去に起こったことを示します。これは私たち聖徒の罪からの救いのことばです。私たちが主イエス・キリストを罪からの救い主であると信じた時に、その神の働きは始まったのです。このことについて、ガラテヤ3：3では「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」と書かれています。私たちの救いは御霊によって始まった、つまり神が私たちの心の中に、救いのみわざを始めてくださったということばを教えてください。

つまり、救いとは神が主権的なみこころでもって私たちを救い、神の働きを始めてくださったといことばです。エペソ2：1-3に「:1 あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」とあります。私たちは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であったと聖書は言います。死んでいる者は、自分で話すことはできません。動くこともできません。自分で考える死人もありません。自分で助けを求めることも、救いを求めることも死人にはできないのです。しかし、続けて、2：4-6を見ると、「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」と書かれています。霊的に死んでいた者を救われたのは神です。あわれみ豊かな神が私たちを愛してくださったゆえに、聖徒を救ってくださったと書いています。まさに、このピリピ1：6で、神が聖徒のうちに良い働きを始められたのは、神が私たちの救いを始めてくださったことであることを明らかにしています。

4) 神が完成して下さる (未来形：完成する 仕上げる)

ピリピ1：6に戻って、四つ目にパウロが確信していることは、神が救いを完成して下さるといことばです。この「完成して下さる」といことばは未来形といって、これから起こることを意味します。「完成する」とか、「仕上げる」とい意味のことばです。私たちは、主イエス・キリストを信じた時に罪から救われます。これを「義認」と言います。しかし、それで神の私たちに対する働きが終わってしまうわけではありません。パウロがここで述べているとおり、神は私たちのうちに良い働きをされて、私たちを罪から聖め、キリストに似た者へと変えていってくださいます。この救いを「聖化」と

言います。パウロは神がこの聖化の働きを聖徒のうちに完成させてくださるお方であるところから言うのです。

ローマ 8 : 28 - 29 で「:28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。:29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの子供たちの中で長子となられるためです。」とパウロは書いています。この「神を愛する人々」とは、救いをいただいた聖徒のことであり、神のご計画に従って召された人々であると言います。そして、「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」ということばですが、この「益」とは、まさに今私たちが見てきたピリピ 1 : 6 に出てくる「良い働き」の「良い」という意味の“アガソス”という同じことばが用いられています。この「益としてくださる」ということ、つまり、神が聖徒のうちにしてくださる良い働きは、ローマ 8 : 28 - 29 を見るならば、29 節での文脈が明らかとなります。「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。」、これが 28 節で言う「益としてくださる」という「益」なのです。ここで語られている「益」は、神が私たちがキリストに似た姿に変えていってくださる。神は私たちが神の良い働きによって、キリストの姿に似たものに変えてくださるということです。これが、神が聖徒のうちにしてくださる働きです。

ここで注意したいのは、この「益としてくださる」という意味を、私の願いのとおりになるのだとか、きっと最善になるのだと間違えて解釈しないことです。神は最善をなさるお方ですが、このローマ 8 : 28 が教えている益とは、29 節のキリストの形と同じ姿にあらかじめ定められており、私たちがキリストに似たものに変えられていくということがパウロのいう益とされるということです。

同じように II コリント 3 : 18 でも「:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」と書かれています。聖徒は神が心のうちになさる良い働きによって救われ、主と同じかたちに姿を変えられていく、これが神のご計画です。神が完成してくださる救い(聖化)は必ずなされます。神は完全な方であり、約束どおりに私たちにしてくださいます。もし私たちが自分の力で神のことばである聖書に従い、自分の力で変わっていきなさいと言われていたら、どうでしょう? 難しいです。いや、不可能です。でも、聖書は、神が主体的に私たちに救ってくださり、私たちが罪から聖め、神の救いを私たちのうちに完成してくださると教えています。神が聖徒の救いを始め、完成してくださるのです。ですから、私たちはこの神の働きに信頼することができるのです。もし今あなたが罪との格闘のうちに弱さを覚えていても、自分がどれほど神の前に不完全であることを示されて、悲しみを覚えていても、神があなたを救ってくださる、これが聖書の約束です。

神とは、あなたを罪から救い、罪から聖め、神のご計画に従って、神の栄光を現す天国の民としてくださるお方です。だから、パウロはピリピの聖徒の救いが完成されることを確信していました。その確信は、私たちにも感謝と希望を生み出すものです。なぜなら私たちが神にあって救われ、日々キリストに似たものに変えられていくという働きが神によってなされることを信頼できるからです。なんと感謝なことでしょう。私たちにはこの神が救ってくださるという感謝と希望があるのです。

5) 神がキリストの日が来るまでになされる。

さて、パウロの確信の五つ目のポイントは、6 節にあるとおり、神がキリストの日が来るまでに救いの働きをなされるということです。神が必ず働きをされますが、キリストが再臨される日——これはピリピ 1 : 10 や 2 : 16 にも出てきますが、キリストが再び来られて、私たちがキリストの前に立つ日のことです。このキリストの日というのは、聖徒が決して永遠の滅びに至る罪のさばきを受けるのではなく、神から救いをいただいた者として、イエス・キリストの御前に立つということを教えてくれます。パウロはこのことを、ピリピ 3 : 20 - 21 で「:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこか

ら主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。：21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」と述べました。パウロはここで、イエス・キリストが再臨された時に、必ず私たちはキリストのような姿、栄光のからだに完全に換えられるのだと言います。私たちは、キリストの再臨を待ち望んでいる天国に国籍を持つ民です。いつの日かキリストにお会いした時に、“栄化”という救い、私たちは罪が全く聖められ、完全なものとされるという希望を持って生きることができます。

パウロはこれらのことを「確信しています」と完了形で述べました。パウロは神の働きがピリピの聖徒のうちになされることを強く確信しました。パウロは神が私たちのうちに良い働きを始め、救ってくださり、また救いの働きを完成してくださる方であることを述べ、キリストの日までそれが続くことを確信していたのです。私たちもこの神がなされる働きを確信し、また感謝し、希望を持つことができます。それが神のご計画であり、神のなされる働きであるからです。

C. パウロの感謝の根拠 7－8節

さて、最後に7－8節を通して、パウロの感謝の根拠を見ましょう。「：7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。：8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしとてくださるのは神です。」とあります。

1) 福音宣教がパウロの状況に左右されない。

パウロがここであかししていることは、福音宣教がパウロの状況に左右されなかったということです。パウロがピリピの聖徒たちとともに、反対する者に福音を弁明している時も、福音が正しいことを立証する時も、ともに福音宣教の働きをしました。それだけでなく、ピリピ教会の聖徒たちは、パウロが投獄されていても、投獄されていなくても、ずっと変わらず福音宣教の働きをしたと言うのです。ですから、パウロはピリピの聖徒の救いを確信するのは正しい、当然であると言います。ピリピの聖徒は福音宣教への参加という恵みに、パウロとともにあずかった人々であるとパウロは述べました。彼らはどんな状況でも福音宣教の態度は変わらず、信仰をあかししたのです。

2) ピリピの聖徒をパウロは愛していること

さらに8節でパウロは、なぜなら、神が私の証人であると語り、パウロがすべてのピリピの聖徒をキリスト・イエスの愛で愛したことを伝えました。パウロは、「どんなにあなたがたすべてを慕っているか」と言ったとおり、ピリピの聖徒ひとりひとりを思い出し、愛し、喜び、祈りを捧げました。なぜなら、神のすばらしい救いの働きがピリピの聖徒になされていたからです。

さて、皆さん、このピリピの聖徒たちが、反対者や迫害がある中でも、パウロとともに福音宣教を続けていた彼らの動機は、一体何でしょうか？先ほど見たⅡコリント8：1－5をもう一度見てください。そこに彼らの動機が出てきます。1－2節に「：1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。：2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」とあります。パウロは、聖徒たちが献金をささげ、福音を伝える働き、自分自身を主にささげ、みずから進んで熱心に願った動機は、救いの喜びであったと言うのです。まさにペテロがⅠペテロ1：8－9節で言うように、「：8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。：9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。」、ピリピ教会だけでなく、初代教会の聖徒たちが心に持っていたものは救いの喜びです。彼らは自分自身の救いを確信し、心のうちにある救いの確信の喜びが動機となって、彼らの持つ救いを感謝し、希望をもって伝えたいと熱心に願ったのです。

これがピリピの聖徒たちがどんな境遇にあっても、神の救いにとどまり、信仰者として歩み、自分の持つ信仰の希望を伝えたいと願った動機でした。

たとえ距離的に離れていても、パウロの必要を満たしたいと贈り物をしたり、エパフロデトを派遣したのもそうです。彼らの心のうちに救いの喜びがあり、神への感謝と愛のゆえに、彼らは喜んでささげ、また仕える者となりました。彼らは神を愛し、喜んで神に従おうとしたのです。聖徒たちは、主イエス・キリストの贖い、すなわち、自分の罪のために支払われた代価を忘れなかったのです。パウロがピリピ1：21で、「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」、生きるにしても死ぬにしても私の身によってキリストがあがめられることを願うと言ったとおり、救いを考えた時に、彼らは主イエス・キリストの十字架を思ったのです。主イエス・キリストの十字架の死と復活が私たちの救いの代価です。イエス・キリストが十字架の上で「完了した」と宣言された時、それは私たちの罪の代価がすべて支払い終わったという意味です。死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっていた私たちの代価を、主が完全に支払ってくださった。これが、神が成し遂げられたことです。主イエス・キリストは私たちの罪を贖うために、十字架の上で苦しみを受けられました。「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。」とイザヤ53：3にあるように、イエス・キリストは私たちのために十字架に架かれ、また文字どおりのけ者とされました。

十字架刑というのは非常に残酷な苦しみを伴う死刑の方法です。ローマに反乱を起こした者や強盗などの重い犯罪を起こした人のみが十字架につけられました。同時にこの十字架刑というのは人々から、のけ者にされる刑でもありました。単にあざけられ、孤独であるだけではなく、その手足に打たれた釘は、手や足の筋肉や腱、神経を損傷し、障害を起こすのです。仕事ができなくなり、社会的にも疎外され、のけ者にされ、あざけられ、そして死んでいく、そのような死刑の方法です。イエス・キリストは、みずからそのような十字架の苦しみを私たちの罪のために味わい、私たちの背きの罪の罰を代わりに負われました。そのイエス・キリストの十字架の死と復活が私たちの罪のためであったことを、私たちは知っています。そしてピリピ教会の聖徒、初代教会の聖徒たちも自分の民にささげられた神のこの救いを心から確信し、喜んだのです。

<まとめ>

私たちがきょう、ピリピ1：3-8を通して学んだことをまとめると、次のように言えます。神とは私たち聖徒を罪から救ってくださる方です。そして、神は私たちの心のうちに良い働きを始めて、罪から救ってくださるだけでなく、罪から聖め、キリストに似たものに変えてくださる働きを完成してくださる神であるということです。神は救われた私たちを通して、神のすばらしさを現わしてくださいませ。また私たちが救われた福音を伝える機会を与えてくださっています。神は聖徒を罪から救い、罪から聖め、救いを完成し、神の栄光を現す者、天国の民としてくださいました。神が救いを始め、完成してくださる。それがあなたの神です。

皆さん、神の救いを確信する者は聖徒だけが持つことのできる神への感謝と希望を持って生きることができます。私たちはどうでしょうか？ 私たちも自分自身の救いを確信し、神への感謝と希望を持って生きていこうではありませんか！